

豊川小だより

1月号

「学ぶ楽しさ」がある学校を目指して

ホームページ
QRコード



令和7年1月8日
北区立豊川小学校
校長 中村 順子

校長 中村 順子

明けまして おめでとうございます。

ここに来て久しぶりの降雨がありました。例年以上に乾燥した晴天が続いたお正月となりました。皆様お健やかに新たな年をお迎えのことと思います。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。



*

年末に、東京大学先端科学技術センター客員上級研究員の肩書きをもつ、木村健太さんという方の文章を読む機会がありました。内閣府の科学技術に関する会議や、経済産業省の「未来の教室」などの委員を務められた方だそうです。

その木村さんの記述の中に、このような内容がありました。

「日本の学校には、集団を小分けにした班（グループ）はあっても、シナジー（互いに作用しあうこと）を生み出しながら協働して取り組む『チーム』が少ないと感じています。メンバーそれぞれの強みを生かし、苦手を補い合って目標を達成するための『チームビルディング』を経験してほしい。」

「授業のあり方も、まず大前提を『楽しい』にしたい。楽しいにはいろいろありますが、入口はファニー（funny）でいい。それをインタレスティング（interesting）の意味での『楽しい』に変えていけるように授業を構成する。生徒が学びたくて、毎日学校に来たくてたまらないような、ですね。そして、研究者や起業家が感じている楽しさ、すなわちエキサイティング（exciting）にまでできたら最高ですね。」

*

日本の学校での旧来の教育は、長年「知識を与える、得る」ということが軸になっていました。しかし、特にここ数年は、児童が自ら課題をもち、学び、広げていく、すなわち「令和の日本型教育」とも言われる探求学習を進めていくことがスタンダードとなっています。その際に一番難しいことは、「児童が自ら課題をもち」の部分であると感じています。本来、子供たちは好奇心が旺盛です。目の前に見たことがない箱があれば、小さい子ほど触って開けようとします。覗き込もうとします。もっと知りたい、調べたいということがあれば、必ず行動を起こすのが子供たちです。「危ないからやめなさい！」と止めるのではなく、その好奇心を満たすために、大人は何をすればよいのかを考え、サポートしていくことが、これからの学校教育だと思います。そして、調べるために難しい字が読めるようになりたい、角度を測れるようになりたい、昔の歴史をひもといてみたい…子供たちのこのような気持ちを想定し、指導の引き出しの内容を充実していくことが、私たち教員の役割だと考えています。そのためにも、今年度の研究目標である「非認知能力が高い児童の育成～児童の思いや願いに応えられる授業作りを目指して」を、1月以降も行っていきます。

*

また本校では、今年度の当初より、学年での連携を強める取り組みをしています。担任は自分の学級だけでなく、日頃から同じ学年の児童を見守り、担任同士の連携を取りながら学年経営を行うことで、一人一人の児童への指導が少しでも行き届くような体制を作っています。上記の木村先生の記述にある『チームビルディング』的な発想に基づく学年・学校経営をさらに推進してまいります。

新たな年を新たな機会と捉え、子供たちの学ぶ意欲をさらに育てていく環境を全職員で整えていくために、引き続き研鑽を深めてまいります。